

(十) 高野山萬燈會の願文

たかののやままんどうえ

天長八年（八三一）五月、空海は悪瘡つまりタチの悪い皮膚の炎症を発症した。癰だともいう。癰は、黄色ブドウ球菌が毛包（毛穴の奥で毛根を包んでいる部分）や脂腺（皮脂を通す分泌線）に感染して増殖し、となり同士の複数の毛包や毛包の周囲に同時に炎症を起し、それが周囲の皮膚組織にも広がり黄色ブドウ球菌がつくるいろいろな毒素によつて膿瘍ができる皮膚疾患である。現在では抗生物質で治療するが、空海の時代はなすすべもなかったのだらう。皮膚の小さな傷や皮膚が湿った状態が長くつづくとなつて発症するらしく、高野山の草堂には湿気が多かったことを想像させる。

吾レ、去ンジ天長九年十一月十二日ヨリ、深ク穀味ヲ厭ヒテ専ラ坐禪ヲ好ム。

吾方生期、幾バクナラズ。仁等好シク住シ慎ミテ教法ヲ守レ。

吾レ永ク山ニ帰ラン。吾レ入滅ニ擬スルハ、今年三月二十一日寅ノ刻ナリ。

諸ノ弟子等、悲泣スルコトナカレ。吾レ若シ滅スレバ、両部ノ三宝ニ帰信セヨ。

自然ニ我ニ代リテ眷顧ヲ被ラレン。（『御遺告』）

空海は、天長九年（八三二）十一月十二日から五穀を口にすることをやめ坐禪（念誦法）三摩地に入ると弟子たちに言ってから、ずっと弥勒菩薩の尊像の前に結跏趺坐し「慈氏念誦法」に明け暮れる日々であったかと思われる。時には金剛界曼荼羅を前にし、三昧耶会・微細会・羯磨会・降三世会・降三世三昧耶会に並ぶ「賢劫十六尊」のなかの慈氏菩薩（弥勒）に心を集中し、時に胎藏生曼荼羅の前に「中台八葉院」の東北の蓮弁に描かれている弥勒菩薩を心に観じ、その真言（オン バイタレーヤ ソワカ）を何万遍も誦じていたにちがいない。

弥勒菩薩の心象は、空海が二十四才の時に著わした仏道選択の宣言の書『三教指帰』にすでに見えている。そのなかで空海は、自らを仮託した仮名乞児の乞食僧の姿を、弥勒の兜率天にいく旅姿だと言っている。

また仮に伝説としても、九度山にある高野山造営の政所で亡くなった母が、弥勒菩薩になった夢告により、自ら弥勒菩薩の尊像を謹刻してそこに祀り慈尊院と名づけたという。空海が終生いかに弥勒菩薩を意識しつづけていたかの証左ではある。

弥勒（慈氏、マイトレイヤ）は、兜率天（色欲・食欲に執着する欲界のうちの六欲天の第四、内院・外院があり、内院は将来仏となるべき菩薩のいるところ）の内院にあつて、欲の執着から離れられない衆生に法を説く教化活動をしている菩薩で、釈尊の亡きあと、釈尊の説法救済に漏れた者を救うため説法することを釈尊から認められていて、釈尊入滅

後五十六億七千万年ののちに人間の世界に下りてくるという。

この弥勒菩薩への信仰は、空海の若き日に奈良法相宗の寺（法隆寺や興福寺）で盛んにあった。未来世救済の仏としての信仰のほか、法相宗では初祖を弥勒とするからである。わが国での弥勒信仰は観音信仰とともに仏教伝来とほぼ同時で、すでに飛鳥時代にあった。八世紀になって法隆寺の五重塔内や興福寺北円堂内に弥勒浄土や弥勒像が置かれた。今、北円堂に法相学の大成者でインド大乘唯識派論師の無著・世親兄弟の尊像が祀られているのもそうした背景によるものであろう。

空海は当然、奈良の都に上京してまもなく、大安寺や元興寺や興福寺や東大寺でこの事情を知ったであろう。勤操などから、大安寺が長安の西明寺を模したものであり、その西明寺はインドの祇園精舎に倣ったものであり、その祇園精舎は弥勒のいる兜率天の内院をこの世に再現したものだということも教えられているに相違ない。その大安寺と西明寺で空海は学んだ。弥勒への意識がこの頃から芽生えていたとしてもおかしくはない。奈良で仏教を学んだ空海にとって弥勒への想いは自然な憧憬であった。それが、密教の観法によって、自己の内なるところで弥勒と一体化する経験を積み、よりリアルな自覚になっていったのではないか。

空海は有限の時間としての六十二年の生涯を了えるが、以後は兜率天において弥勒慈尊とともに無限を生きたいと思っただけであらう。瑜伽観法の熟達者空海は、おそらく無限の

不滅の世界の弥勒と一体の瑜伽のまま有限の生身を終えた（滅）のである。密法でこれを「不滅の滅」という。

『続日本後紀』には、空海の死後、東寺の長者になった實慧が長安の青竜寺に送った手紙に、空海を茶毘に付したらしいことが書かれているという。

一方、空海の死後百三十年を経た康保五年（九六八）に、仁海によって書かれた『金剛峰寺建立修行縁起』には、空海の顔色等は死後四十九日経っても変わらず髪やひげも伸びていたとあり、『今昔物語』には、東寺の長者である観賢が御廟を開け空海の伸びきった髪を剃り、着衣や数珠のほころびを直してまた封じたことが記されている。

このことが「空海は死んだのではなくこの世にまだ身を留め三摩地に入ったままである」（「留身入定」という信仰に発展していった。最初は高野山内の弟子たちの間で起きたものである。時間の経過とともに師亡き後の山は人法ともに振るわず荒廃することもある。「空海は死んだのではない、いつもそこにいる」という戒めは、師の「令法久住」の願いを常に意識し自覚しつつづける方便でもあったろう。さらにそれは空海を信じて支えてきた土地の人々にも伝わり、朝廷の貴族や東大寺をはじめとする南都の僧たちにも伝わったであろう。やがて、高野聖が日本全国にそれを広めるほどになった。

ありがたや 高野の山の岩かげに 大師はいまも おわしますなる

それにしても、空海は皮膚疾患に悩みながら最後まで忙しかった。病む前年の天長七年（八三〇）、勅命により『秘密曼荼羅十住心論』十巻とその略本『秘藏宝鑰』三巻を著わした。

翌天長八年（八三一）六月、病を理由に大僧都の位の返上を申し出るが容れられず留任となった。

同九月、最澄の弟子円澄たち十数名から密教の付法を請われ受け入れる。

天長九年（八三二）正月、宮中の「金光明最勝会」を修し国家鎮護を祈る。つづいて紫宸殿において論義を行う。

そして同八月、はじめての「万燈万華会」を行い、その願文に人生の万感を記した。

恭ンデ聞ク、黒暗ハ生死ノ源、遍明ハ円寂ノ本ナリ。其ノ元始ヲ原ヌレバ、各々因縁アリ。……（『性霊集』）

同十一月、高雄山寺を實慧・真濟らに任せ高野山に籠る。穀物を断ち修禅の日々を送る。天長十年（八三三）、高野山金剛峯寺を真然に託し、實慧に後見させる。

承和元年（八三四）二月、東大寺真言院において『法華経』と『般若心経秘鍵』を講じる。『法華経』の講釈は生涯最後の講釈にもかかわらず、詳細な講釈書をつくったという。

『般若心経秘鍵』は、空海最後の著作であった。

同三月、勅により六人の高弟とともに比叡山に上り、西塔院の落慶法要に列し咒願師の役をつとめる。

承和二年（八三五）正月八日より七日間、空海の願い出によって、毎年年初に行われてきた「金光明最勝会」に代り「後七日御修法」がはじめて宮中で行われた。正月から水分も断っていたといわれている。

同正月二十二日、真言宗年分度者三名を上奏、翌日認められる。

同二月三十日、金剛峯寺が定額寺として認められる。

同三月十五日、弟子たちに遺告を与える。

同三月二十一日寅の刻、入定。

同三月二十五日、仁明天皇は勅使を遣って喪料を供え、淳和上皇は弔書を送る。

同十月、嵯峨上皇が挽歌を贈る。

長安の青竜寺では、一山肅然として皆素服を着けて弔意を示したという。

●本文…恭聞 黑暗者生死之源 遍明者圓寂之本。原其元始 各有因緣 日燈空擊 唯除一天之暗 月鏡懸漢 誰作三千之明 至如大日遍照法界 智鏡高鑒靈臺 内外之障悉除 自他之光普舉 欲取彼光 何不仰止

書き下し…つつし 恭んで聞く。黑暗は生死の源、遍明は圓寂の本なり。其の元始を原ねれば、

各々因緣あり。日燈空に撃げれば、唯一天の暗きを除き、月鏡漢に懸ければ、誰か三千

の明を作さん。な 大日遍く法界を照らし、智鏡高く靈臺に鑒るが如きに至っては、内外

の障を悉く除き、自他の光普く舉る。たげ 彼の光を取らんと欲せば、何ぞ仰止せざらんや。

私訳…心を引き締めて次のことを聞いている。無明（生命欲）は人の生死の根源であり、仏の智慧の光は涅槃（サトリ）の根本である、と。その原初に踏み入ってみると、生死にも涅槃にもさまざま必要な要素や背景（因縁）があるもので、太陽が空高く上がればただ三千世界のうちの一世界の天の暗さを除き、鏡のような満月が天の河にかかれれば三千世界に誰が仏智の光明を照らそうか。（であるから）大日如来が遍く法性の世界を照らし、衆生を映す大悲の鏡を高く心霊に照らしてよく観察するようなことに至れば、心の内外の障礙をことごとく除き、自利利他の光が普く集まってくる。その光を取ろうと望めば

どうして仰ぎ見ないでいられようか。

※註記1… 黑暗は、無明。

※註記2… 遍明、世界を遍く照らすサトリの智慧の光。

※註記3… 圓寂は、涅槃。

※註記4… 日燈は、太陽。

※註記5… 一天は、三千世界の中の一世界の天。

※註記6… 月鏡は、前述。鏡のような満月。

※註記7… 漢は、天の河。夜空。

※註記8… 三千は、三千世界。一仏が衆生済度する世界を一世界とする。

※註記9… 智鏡は、大日如来の衆生を映す大悲の鏡。

※註記10… 靈臺は、心、靈府。

※註記11… 仰止は、仰ぎ見ること。転じて聖者や高德の人を仰ぎ見て慕うこと。

● 本文… 於是 空海 與諸金剛子等 於金剛峯寺 聊設萬燈萬花之會 奉獻兩部曼荼

羅 四種智印 所期 每年一度 奉設斯事 奉答四恩 虛空盡 衆生盡 涅槃盡

我願盡 爾乃 金峯高聳 下睨安明之培塿 玉毫放光 忽滅本釋之熾日 濫字一炎

乍飄法界除病 質多萬花含咲 諸尊開眼



書き下し…是に、空海、諸々の金剛子等とともに、金剛峯寺に於いて、聊いささか萬燈萬花まんどうまんげの會え

を設け、兩部の曼荼羅、四種の智印ふじんに奉獻ぶけんす。期する所は、毎年一度、斯の事を設け奉たてまつ

り、四恩しおんに答え奉らん。虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願ねがいも尽きん。爾それれ

ば乃ち、金峯高く聳そびえて、下に安明あんめいの培壞ほうろを睨にらみ、玉毫光ぎよくうを放はなつて、忽たちちに梵釋ぼんしやくの焮日かくじつ

を滅めつさん。濫字らんじの一炎、乍たちちに法界ほふうに飄ひるがえつて病を除き、質多しつたの萬花、咲えを含んで諸尊

眼を開かん。

私訳…ここに、空海、諸々の弟子たちと、金剛峯寺にて、少々万灯万花の法会を設営し、

金胎兩部の曼荼羅、大・三・法・羯の四種智印に、(万灯万花を) 獻けんじ奉ろうと思う。

その志すところは、毎年一度、この法会を設営し奉り、仏や父母の恩に答え奉ることである。虚空が尽き、衆生が尽き、涅槃が尽きれば、私の願ねがいも尽きるだろう。そうであ

れば、金剛峯寺が高くそびえて、下に須弥山の小さな丘をながめ、本尊の白毫は光明を放はなつて、たちまちに梵天と帝釈天が照らす光明を消してしまい、智火の種子であるラン

字の一つの炎(万灯)はたちまち法性の世界に燃え広がって(衆生の無明の) 病を焼き

除き、(大悲)心の万花は笑みを含んで諸尊の眼を開くであろう。

※註記1…金剛子は、金剛乘(密教)の仏子。弟子。

※註記2…萬燈萬花は、一万の灯明と一万の花を山の仏尊に供えること。

※註記3…四種智印は、前述。

※註記4…四恩は、『大乘本生心地觀經』は三宝(仏・法・僧)・国王・衆生・父母の恩、

『正法念經』は父・母・如来・説法の恩を言うなど諸説ある。

※註記5…虚空尽きくは、『華嚴經』十地品(『八十華嚴』第二十六之一)の初地(歡喜地)に言われる「十尽句」による。

佛子 菩薩住歡喜地 發如是大誓願 如是大勇猛 如是大作用 以此十願門爲首 滿足百萬  
阿僧祇大願 佛子 此大願以十盡句而得成就 何等爲十 所謂衆生界盡 世界盡 虚空界盡  
法界盡 涅槃界盡 佛出現界盡 如來智界盡 心所縁界盡 佛智所入境界盡 世間轉法輪  
智轉界盡 若衆生界盡 我願乃盡 若世界 乃至世間轉法輪智轉界盡 我願乃盡 而衆生界  
不可盡 乃至世間轉法輪智轉界不可盡故 我此大願善根 無有窮盡

※註記6…金峯は、金剛の峯、金剛峯寺。

※註記7…安明は、須弥山(スメール)。スメール(Jumeru)を蘇迷盧(そめいろ)・須弥

留（しゅみる）・妙光・妙高・安明などと漢訳する。

※註記 8 … 培塿は、小さな丘。

※註記 9 … 玉毫は、仏の白毫。

※註記 10 … 梵釋は、梵天と帝釈天。

※註記 11 … 憚日は、光明。

※註記 12 … ラン字は、智慧を象徴する火の種字。万灯。

※註記 13 … 病は、無明。

※註記 14 … シツタは、チツタ (citta) ・心。ここは花に象徴される大悲心。

● 本文… 仰願 藉斯光業 自他拔濟 無明之他 忽歸自明 本覺之自 乍奪他身 无

盡莊嚴、放大日之惠光 利塵智印 發朗月之定照 六大所遍 五智攸含 排虛沈地

流水遊林 惣是我四恩 同共入一覺 天長九年八月廿二日

書き下し… 仰ぎ願わくは、斯の光業こうごうに藉よつて自他ぼつさいを拔濟せん。無明の他忽ちに自明に歸り、

本覺の自乍ちに他身を奪わん。無尽の莊嚴は大日の惠光えこうを放ち、利塵りじんの智印朗月ちいんらうげつの定照じやうしやうを發せん。六大の遍する所、五智の含む所、虚を排し地に沈み、水を流し林に遊ぶは、

惣すべて是れ我が四恩しおんなり。同じく共に一覺に入らん。天長九年八月廿二日

私訳…仰ぎ見て願わくは、この灯りの法会によつて、(本来の)自己と(本来ではない)他己をとにも濟度することである。生命欲(煩惱)に生きる(本来ではない)他己はたちまち(本来の)自己のサトリの智慧に帰り、如来藏を具する(本来の)自己はたちまちは、明月が定んで光明を發するようになり、決して衆生を救濟する。六大からなる衆生も、五智を具する五仏も、虚空に並ぶ鳥類も大地にもぐる虫類も水に流れる魚類も林に遊ぶ禽獸もすべて四恩であり、共に同一のサトリに入れますように。天長九年八月廿二日。

※註記1…光業は、灯りの法会。

※註記2…自明は、(本来の)自己のサトリの智慧。

※註記3…本覺は、如来藏。

※註記4…他身は、(生命欲に『生きる』)他己の身体。

※註記5…無盡莊嚴は、三無尽莊嚴、身口意の三密。

※註記6…惠光は、智慧の光明。

※註記7…利塵は、前述。国土の塵。無数。

※註記8…智印、前述。四種智印。

※註記 9 .. 朗月は、明月。光明を放って衆生を濟度すること。

※註記 10 .. 定照は、決して照ること。

※註記 11 .. 虚は、虚空、鳥の比喩。

※註記 12 .. 地は、大地、虫類の比喩。

※註記 13 .. 水は、魚。

※註記 14 .. 林は、けもの。

※註記 15 .. 四恩は、前述。父母・衆生・国王・三宝の恩など。

※註記 16 .. 一覺は、同一のサトリ。